



古墳 未来の考古学者 研究披露 石器

高校生ポスターセッション 県内2組参加

考古学を勉強する高校生と研究者を結ぼうと、日本考古学協会が実施している「高校生ポスターセッション」に、今年は県内から2組が参加。24日に東京の青山学院大学で開かれた同協会の総会で研究成果を披露した。

参加したのは県立榎原高校の考古学研究部と、奈良学園高校3年の廣瀬友一郎さん。

榎原高校3年の中島陸貴さんと石橋秀虎さんは、入部した1年の時から「石器で肉を切ってみよう」と、県内で採れるサヌカイトで石器作りを始めた。中島さんは「昔の人たちがゼロから習得したように、あえて石器の作り方を詳しい人に教えてもらわず、自分たちで見つけていこうと考えた」と振り返る。

ハンマー代わりに石でサヌカイトをたたく時、力任せにおついても「ガンツ」と鈍い音がして、割れるというより欠けるだけだった。「石の表面に対して鋭角になる方向から、腕の遠心力を使っただけだと、『キーン』という音がしてきれいに割れるとわかった」と石橋さん。石に割れやすい「目」があることも次第に見えてきたという。

サヌカイトとそれ以外の石材の割れ方や、石器にしたときの使い勝手の違いもチェック。そうして得た知識を「石器の軌跡」と題したポスターにして発表した。

奈良学園高校の廣瀬さんは、自宅のある兵庫県西宮市の八十塚古墳群を訪ね、古墳に関心を持った。しかし本などで調べ

るうちに、同古墳群では開発で多くの古墳が姿を消したことを知り、どうすれば将来も古墳を残していけるかを考えるようになったという。

半分が築造当時の姿に復元された河合町のナガレ山古墳や、横穴式石室が露出した明日香村の石舞台古墳など、県内や周辺府県の古墳を見学。一見学や観光、信仰など、様々な「体験」を通じて古墳に興味や関心を持つことが、今後も残していくために重要だと感じた」と話す。その気づきを「「これまでの」古墳から「これからの」古墳を考える」というポスターにまとめた。

今回のポスターセッションには11組が参加。全国的に高校の歴史・考古学系のクラブは減っており、

講評した日本考古学協会の石川日出志会長は「高校で独自に考古学に取り組むことは次第に難しくなっているが、みなさんにはぜひこれからも研究を続けてほしい」と呼びかけていた。

(今井邦彦)